大江山　―現代語訳―

和泉式部が、藤原保昌の妻として、（夫の任国の）丹後の国に下っていた間に、都で歌合があった（のだが、その）ときに、（和泉式部の娘の）小式部内侍が、（その）歌合の詠み手として選ばれて（歌を）詠んだのだが、（そのときのこと）定頼中納言が、ふざけて、小式部内侍が（部屋に）いた時に、「（あなたが）丹後（の母上のもと）へおやりになった使いの人は（都へ）帰参しましたか。どんなに（使いの帰りを）待ち遠しくお思いのことでしょう。」と言って、女房たちの部屋の前を通り過ぎなさったが、（小式部は、入り口の）御簾から半分ほど（体を）出して、ちょっと（定頼中納言の）直衣の袖を押さえて、

大江山…大江山から生野へとたどって行く丹後への道は遠いので、私はまだ天の橋立に足を踏み入れたこともないし、そこにいる母からの文も見ていません。

と（歌を）詠みかけた。（定頼は即興の歌の見事さに）意外であり、驚いて、「これはどうしたことだ。こんなことがあるものか。」とだけ言って、返歌もできず、袖を振り放してお逃げになった。

小式部は、このことがあってから、歌詠みとしての評判が出てきたのだった。

こうしたことはごく普通で当然のことなのだけれども、あの中納言のお心には、（小式部が）これほどの歌を、即座に詠み出すことができるとは、お分かりではなかったのであろうか。